



上原 元 腎臓内科部長



佐久田朝功 腎臓内科医

「患者さんだけでなく、付き添いの家族の方やヘルパーさんとのコミュニケーションを忠実にやることも安全対策のひとつ」と、中部病院の医療に対する真摯な態度が伺えました。

透析看護の一番の課題は、精神面のケアという渡嘉敷看護師長。「もう透析には行きたくない、という患者さんに対しては、患者さんの気持ちに寄り添い、共感し、自ら行動変容できるように関わっていく看護が大切です」とのこと。

患者さんの心を開く コミュニケーション



渡嘉敷千枝子 看護師長



嵩本尚子 看護主任

「穿刺困難で穿刺トラブルを起こす患者さんに対しては、カンファレンスを持ち、密なコミュニケーションと統一した関わりをもつことで信頼関係を深めることができました」とコミュニケーションの重要性を指摘されました。

また、抜去の危険がある患者さんの腕に鈴をつけると、「やさしい音色で危険を知らせてくれるので、安全確保に役立つ」とそうです。

保存期の重要性を訴える 腎臓病教室を開催

最近、新しい取り組みとして



長尾英光 看護師/リンクナース

「24時間透析医療を提供する上で、今後も技術の向上とともに、患者さんの精神的ケア、QOL向上に努めてゆきたいと思っています」と抱負を話してくださいました。

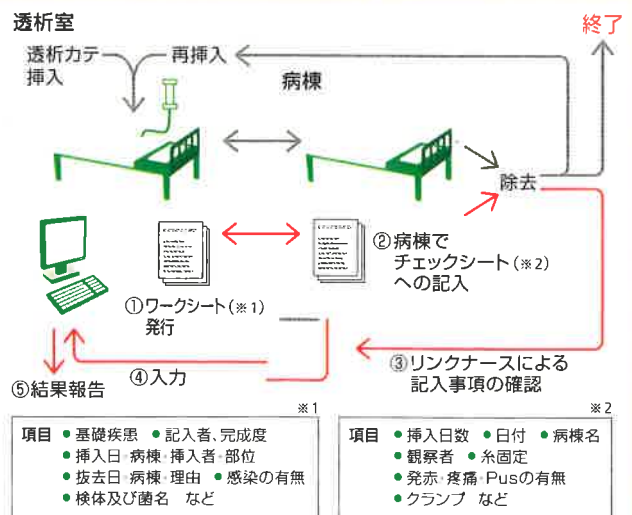
最後に、渡嘉敷看護師長は「病教室」です。中心となっているのは、実際に研修医制度で腎臓内科専門医となられた佐久田先生。保存期患者さんへの教育により透析導入を少しでも遅らせることをめざして、月に1回「腎臓病教室」を開催しています。テキストは、看護師・薬剤師・栄養士などの分担執筆によるものですが、表紙のイラストを描かれたのは、佐久田先生ご自身。これまでに3回行われた腎臓病教室については、「始めたばかりで実績は…」とのことですが、確かな手ごたえを感じておられるようです。



「院内感染対策委員会」で感染症を予防

中部病院では、病院全体で院内感染対策に取り組んでいます。透析室における感染予防の実際について、長尾看護師にお話をうかがいました。

「当院では、院内感染対策小委員会によるサーベイランスを中心とした感染対策を展開しており、ICD・ICN・各病棟のリンクナース・細菌検査技師・薬剤師が協力しながら、院内感染の減少を目指しています。透析室では、1995年よりCDCの定義を参考に『透析用留置カテーテル関連菌血症サーベイランス』を実施しています(右図参照)。透析用留置カテーテル挿入後、ワークシートとチェックシートを発行し、病棟リンクナース・透析室看護師との協力のもと菌血症の有無などを観察します。カテーテル除去後、病棟リンクナースが記入したワークシートが私に届き、確認後コンピュータ入力し、結果を月1回の委員会で報告。定期的なフィードバック・感染事例の検討を実施しています。マキシマルバリアプリケーションの徹底・マニュアル作成・繰り返し教育の結果、感染率は減少しています。また、透析室のスタンダードプリケーションの普及にも力を入れ、穿刺・返血時のゴーグル装着、患者ごとの手洗いと手袋着用などの徹底を図っています」



透析カテーテルを介した菌血症のサーベイランスの進め方